

ており、今後全面的な改修を進めて行くという計画のようだった。

一面に広がる青田の中を、得米の姿を想像しながら百太郎溝をさらに走らせる。

現地ルポ

(その2) 水田が欲しい!!

高森町草部の土地改良

団体営の土地改良事業、それは農民の土地改良に対する熱意を物語るように、いま県下各地に完成し、実施され、又計画されている。ここに紹介するのは、阿蘇外輪山の草深い部落のたどった土地改良の歩み……この中から、土地改良のつ意義が見出せないものだろうか。

ダムへの山路にて……★



小崎さん

「私達が子供の頃までは、この附近の主食はトモロコシでした。水田は殆んどなく畑ばかり。平坦地の農家と較べたら、生活程度はそれは低く低いものでした。」細い山路を、夏草をふみわけながら灌漑用のダムへ案内する芹口・草部土地改良区理事長の小崎敏雄さんはほつりほつり話してくる。ここは阿蘇郡高森町草部(旧草部村)、宮崎県山々がはるかに見えるところ。宮崎交通のバス道路からは歩いて約五百メートル、川走川の水をせきとめたダムが、うつそうと茂つた夏木立の間に見えがくれし、そうそ

うと水が溢れ、しぶきをあげている。高さ三〇メートル、巾七〇メートルのダムは貯水量約一万吨。取水口から約一キロメートルのトンネルを通つて部落に入った水は、幹線・支線合せて八キロメートルというコンクリート張りの水路によつて、約八〇ヘクタールの水田をうるおしている。この水田こそ、ダム建設を含む土地改良事業によつて、この山の畑を転換させたものだ。

「土地改良というのはまことに地味な事業です。だが、この地区の人々にとつては、大げさに云えば、生活の革命をもたらしたものと云えますよ。」と、同行の高森町役場瀬井建設課長が話をつげば小崎さんは「おかげで畑収入一〇アールでせいぜい五千円位だったものが、水田収入三万円以上にもなつた。予約米も目標額を軽く突破しているし、三十三年度の米の多収競争では熊本県一もこの土地改良区から出している程です。」小崎さんはダムを見おろしながら話をつける。やがて話題は、祖父の時代の土地改良事業へとさかのぼる。

畑を水田につくりかえ……★

土地改良といえは、平坦部では徳川時代以前から行われてきたが、この山中ではやつと日露戦争が終つた頃からであつた。水田はなく、殆んどがトモロコシや陸稲の畑ばかり。そのため収入はお話にならない程低い。平坦地のように水田をもちたい。という農民の願いは悲しいまでに切ないものがあつた。今は故人、芹口政彦さんが「畑を水田につくりかえよう。」とたち上つたのが明治四十二年。用水路開き願を時の県庁に提出し、許可がおりたのが四十五年。それから三年、芹口さんは私財を殆んど投げ出して先頭に立つた。部落民達は、たわぶに捻つた水稲を夢に描きながら溝を掘り、モッコをかつた。大正四年、工費二万四千円の用水路が完成し、こんこんと流れる水が畑を水田に換えてゆく。こうしてできた水田は三十二ヘクタール。

だが……私財を投げ出して先頭に立つた芹口さんの畑には、地勢の関係で水は全くはいらなかつた。芹口さんは、それから相変らず畑を耕やしていた。今、芹口さんの家は絶え、孫にあたる人々も遠くへ散つてしまつていて、それでも部落の人々は、土地改良の恩人として芹口さんを忘れないという。

土地改良も本格化……★

「川走川の水をダムでせき止め、これを引けば、水田二〇ヘクタールは大丈夫」県でも当時の草部村役場でも太鼓判を押してくれた。当時の改良区理事長は中村市次さん。中村さんは芹口さんの遺志を継ぎ、老体をおして頑張つた。工事はこの土地改良区の団体営とし、設計監督は県が担当した。総事業費約二千六百万円。このうち四割が国庫補助、残り六割のうちの八割(即ち全体の四割八分)は農林漁業資金を借り、自己負担は全体の二割二分でやる事になつた。

組合員の中には「ダムを造つても、地勢の具合で自分の畑に水がくるだろうか?」「自己負担金はもちろん、農林漁業資金の償還金支払いのため、いまに首がまわらなくなるぞ。」色々な心配が人々の話題となつた。中村さんはそんな人々には一人々々説得して廻つた。組合員も一〇〇ヘクタールの水田の魅力によく閉結してきた。役場当局も積極的に支援を続けた。起工は二十七年。ダムから水路にいたる隧道の工事は困難を極めたが、二十九年に全部完成し、更に三〇年には水路のコンクリート張りが完了した。

土地改良で黄授褒章……★

こうして、新たに畑約五〇ヘクタールが水田となつた。これで改良区の水田は合計約八十二ヘクタール。「あと四〇ヘクタールは開田できるのだが、下流に発電所がある関係で、これ以上水を取れないのが残念だ。」と小崎さんはいかにも残念そう。それでも、この山の中、畑ばかりの部落が八二ヘクタールの水田をもつ事ができたという喜びは大へんなものである。それは「平坦地の農家の想像も及ばない喜び」という。中村さんは、この事業の功勞により、去る三十二年五月三日黄授褒章を授けられた。土地改良区理事長の椅子を小崎さんに譲つた中村さんは、いまでも水路の見廻りが楽しみだということである。

向上した農家経済……★

こうして、祖父の時代から営々と続けられてきた土地改良は「トモロコシが主食だった」という地方に大きな成果をもたらしている。畑収入で一〇アール約五千円程度のものが、今では水田収入三万二千元(玄米八俵)と六倍以上にハネ上つた。一〇アール当り四千元の農林漁業資金の償還など、何の苦もなくつた。去年の干パツの時も水は余つた。いま、旧草部地区の主な収入を見ると、およそ米二千五百万円、タバコ一千万円、牛馬九百万円と、米の収入が最も多く、農家経済の大きな柱となつている。

「水田ができてからは家の経済もうんと楽になりました。行商のおばさんも、水田ができてからよう売れるようになったと云つとりましたよ。」とある農家の奥さんは朗らかに笑つていた。

話題のポケット

ももせ草

クモセグサつて ましたのもそこからでした。何だろうとおつし 先生は又生徒たちにも一とにぎやるのですか。クロリずつの種子をやつて、くどこでパーのことです もいから植えたまえとつたよ。明治期から大正 ものです。

を経て昭和九年に亡 ころしてクローバーは郡内のいくなるまで三十年も たるところに少しずつ芽をふき葉を して行つたのですが、その 栄養の多いやわ



らかな葉は牛馬が 好んで食べるし、 紅や白の美しい花 はお百姓たちの目を たのしませるし で、いつかこの草 の名をクモセグサ と呼ぶようになりまし

つとめた百瀬(ももせ)葉千助(はちすけ)先生の姓をとつたものです。百瀬さんは北大(当時の札幌農学校)の出身で一生を阿蘇農の振興に努めた功勞者です。が、牧草の改良にはクローバーの普及が大切だとい

うので、いつもポケットに一ぱいな問題ですが、この際百瀬先生のクローバーの種子を入れておき、かくれた功績を、牧草の王クローバーとともに思い出してその普及に努めたいものです。

↓ダムは溢れ、右側の取水路からは若い水が隧道を通つて水田へ……

